

養護教諭の自己効力感とリフレクションの関連 —量的および質的な検討—

○ 松村 環 (宮城県子ども総合センター)

秋光恵子 (兵庫教育大学)

問題と目的

教師は必ずしも右肩上がりの「垂直的な成長」を辿るとは限らず、「水平的ないしはオルタナティブな成長」もあるという (山崎, 1999)。そのような成長は教育実践上の課題や困難への直面、葛藤の経験が契機となることが指摘されている (山崎, 1999) ことから、自らの実践を振り返り省察するリフレクション (Schön, 2001) にも同様の効果が期待できよう。しかし、研究授業や職員室での情報交換といった一般教諭がもつリフレクションの機会と比較して、養護教諭は基本的に 1 校に 1 人の配置であり、校内で学びあう機会や養護教諭同士の交流する機会が限られている。そのために、仕事に対する手ごたえや自信、成長を実感しにくいことが指摘されている (岡田, 2010)。そこで本研究では仕事に対する手ごたえや自信を自己効力感 (Bandura, 1977) と捉え、養護教諭の職務自己効力感と一般的自己効力感にリフレクションが及ぼす影響について検討する (研究 1)。次に PAC 分析を用いて養護教諭の社会的および個人的な体験がどのように意味づけられ構造化されているのかを明らかにし、その認知構造と一般的自己効力感との関連について検討する (研究 2)。

研究 1

方法

調査時期 20XX 年 7 月。

調査協力者 A 県養護教諭部会総会に参加した養護教諭。

調査方法 会場で 506 名に質問紙を配布し、留置法・郵送法で回収した。353 名から回収され (回収率 69.7%)、有効回答数は 343 名 (有効回答率 97.2%) であった。

調査項目 1) 属性 (学校種、学校規模、経験年数)、2) 自己効力感に影響を与えると考えられる要因 (豊島・吉田 (2009) の 6 項目に 2 項目を追加)、3) 一般的自己効力感尺度 (GSES; 坂野・東條, 1986)、4) 養護教諭の職務自己効力感尺度 (豊島・吉田, 2009)。

結果と考察

1. GSES および職務自己効力感尺度の因子分析

GSES は 1 項目を除き先行研究と同様の 3 因子構造を示した。調査協力者全体の平均値は 6.9 (SD=3.82) で、東條・坂野 (1989) における一般成人女性 (M=9.1, SD=3.93) や小谷野 (1999) における看護師 (M=7.5, SD=3.92) よりも低い値であった。

職務自己効力感尺度も先行研究と同様に 1 因子構造が確認された。調査協力者全体の平均値は 93.0 (SD=13.73) であり、豊島・吉田 (2009) の平均値 (M=93.8, SD=16.1) と同程度であった。

2. 属性による自己効力感の差異

調査協力者の属性を独立変数とする分散分析を行ったところ、職務自己効力感尺度得点において経験年数の主効果が有意であった ($F(4, 323) = 10.97, p < .001$)。多重比較の結果、経験年数 1~5 年と 11 年以上との間

($p < .001$)、6~10 年と 30 年以上との間 ($p < .01$) で有意差が認められた。

3. GSES 得点および職務自己効力感尺度得点に影響を与える要因の検討

2 の結果から経験年数 10 年以下と 11 年以上の 2 群に分け、自己効力感に影響を与えると考えられる諸要因を説明変数、GSES 得点及び自己効力感尺度得点を目的変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行った (Table1)。

Table3 自己効力感影響要因とGSES得点、職務自己効力感尺度得点の重回帰分析結果

各尺度の得点	職務自己効力感尺度得点		GSES得点	
	10年以下	11年以上	10年以下	11年以上
仕事の満足度	-.025	.197 ***	.088	.180 **
職場の人間関係	.317 **	.047	.325 **	.140 *
実践の振り返りやまとめ	.291 **	.413 ***	.098	.122
研修会への参加	.057	-.012	.010	-.028
養教部会での役員の経験	.081	-.008	.202	.018
グループ研究での役割経験	.123	.069	.027	.083
個人的な勉強会への参加	.185	.149 *	.121	.216 **
学会への参加	.046	-.017	.122	.038
調整済みR2乗値	.265 ***	.304 ***	.173 ***	.177 ***

***p<.001 **p<.01 *p<.05

いずれにおいても調整済み R^2 値は有意であり、2 つの自己効力感尺度得点に対して経験年数 10 年以下の群では「職場の人間関係」が、11 年以上の群では「仕事の満足度」と「学校外での個人的な勉強会への参加」が正の影響を及ぼしていた。「職場の人間関係」は 11 年以上の群の GSES 得点にも影響していた。「実践の振り返りやまとめ」は経験年数に関わらず職務自己効力感に正の影響を及ぼしていた。

研究 2

方法

調査時期 20XX 年 8 月~9 月

調査協力者 研究 1 への参加時に個別インタビューへの協力を申し出た協力者から、GSES 得点と経験年数を基に選出された養護教諭 12 名。

調査内容 『養護教諭として仕事をしてくる中で印象に残っている出来事』を連想刺激としてこれまでの経験を振り返ってもらい、PAC 分析を行った。6 週間後に GSES の再測定と PAC 分析で感じたことや気づいたことについて自由記述で回答を求めた。

結果と考察

PAC 分析から得られたクラスターに対する協力者自身の解釈において、GSES 得点が低く経験年数が浅い養護教諭は職場の人間関係に関する悩みや仕事に対する自信のなさ等を語った。GSES 得点の高い養護教諭や経験年数 11 年以上の養護教諭は、周囲から支えられた経験や過去の辛い経験も肯定的に捉え直した様子を語り、それらが成長の糧となったことが窺えた。事後調査における GSES 得点には大きな変化は認められず、PAC 分析の体験が自己効力感を上昇させることは確認できなかった。しかし自由記述からは、PAC 分析を通じた振り返りがこれまでの経験の再統合につながったことが示唆された。